

## 「バンギでの日々」

平橋 真代（友の会会員・「珈琲リトル・ウイング」経営）

私は 6 年程前にアフリカ友の会の活動を知り、いつか中央アフリカを訪れたいと想いを馳せ、今年想いを実らせ、同行させていただきました。

赤土の道、深い緑、青い空、朝早く家の前でおしゃべりを楽しむ人々やゆきかう人々。

初めて訪れたバンギではとても温かくどこか懐かしい印象でした。

現地では給食サービスのお粥作りや子どもたちと遊んだり、みずほ学校で子どもたちと一緒にアルファベ（アルファベット）を学びました。学校で学ぶみんなの真剣で喜びに満ちた顔が忘れられません。今まで学びたくても学べなかった子たちが、私の目の前で目を輝かせ学び、日々マナーやルールを憶えていく姿に心打たれ、教育の大切さを感じました。

空いた時間にみんながサンゴ語を、絵を描いたりしながら一生懸命教えてくれました。私が理解しその言葉を使うととても喜んでくれました。現地の遊びも教えてもらったのですが、動きが激しく暑さで動きが遅くなると気に掛け木陰へ連れて行ってくれ、順番に帽子で扇いでくれました。子どもたちは大人同士が話している最中、用があっても話に割って入らず、じっと待っている事に驚きました。朝診療所へ行くといつも私たちが来るのを待っているエイズ孤児の子がいました。職員と話をしていると、てくてくやって来て、そっと手を繋いで、私の話が終るまでずっと静かに待っています。手の温もりを感じながら、愛されたいと願っているのだと思いました。そしてペンと紙を渡すといつも自分の顔と家の絵を描くので 「あなたの家は？」と聴くと「ここ」と友の会の事を言い、何度も家の絵を描き続ける姿を見て、小さな体で運命を受け入れている事に涙が出ました。

滞在中最も心に響いた事は、3月11日に起こった日本の地震に職員たちは心を痛み16日の朝の会議で急に立ち上がり、日本のため黙祷を捧げてくださった瞬間です。

その時、支援している側がいつ、支援してもらおう側になるか分からないんだ、と学びました。これからの毎日の生活の中でも常に、周りにいてくれる人たちに協力的でありたいと強く想いました。この日のことが心に強く残っています。

診療所で毎日感じたことは、お母さんたちの子どもを見る眼差しが愛情に溢れ優しい事。

子どもたちもそれを感じて安心して遊んでいる。大人たちはおしゃべりを楽しんで、ゆっくりと時間が流れていく。日本で日々いそがしく生活していた私にとって、バンギでのこの時間がとても大切な時間でした。旅を通して今まで当たり前で気づかなかった沢山の事に気づかせてもらい、これからのことも考える事ができました。受け入れてくださったアフリカ友の会の皆様と現地で出逢った子どもたちやお母さんたちに心から感謝しています。これからも私にできることを続けていきたいと思えます。